科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号:34416

研究種目:若手研究(B) 研究期間:2009~2011 課題番号:21720060 研究課題名(和文)

『映画史』以降の地平からのジャン=リュック・ゴダール作品の再解釈の試み

研究課題名 (英文)

A Reinterpretation of Jean-Luc Godard's Work From the Perspective After *Histoire(s)* du cinéma

研究代表者

堀 潤之 (HORI JUNJI) 関西大学・文学部・准教授 研究者番号: 80388412

研究成果の概要(和文):

本研究は、ゴダールが『映画史』以降、第二次世界大戦期におけるレジスタンスやホロコーストや、戦後のパレスチナ問題といった 20 世紀ヨーロッパ史の危機的な瞬間に大いに関心を寄せ、それらに特異なアプローチで迫っていることを、一方では『映画史』以降の作品、とりわけ『ゴダール・ソシアリスム』の精読・註解、他方では特に強制収容所のモチーフに焦点を当てながら旧作を再解釈することによって跡づけたものである。

研究成果の概要 (英文):

Since his magnum opus *Histoire(s)* du cinéma, Jean-Luc Godard is more and more interested in some of the critical moments of 20th century European history, such as the Resistance, the Holocaust, and the Israeli–Palestinian conflict. This study analyzes his idiosyncratic ways of approaching these histories through the close reading of the films following *Histoire(s)* du cinéma—particularly his latest film entitled *Film socialisme*—as well as through the reinterpretation of some of his older films in terms of the subject of the concentration camps.

交付決定額

(金額単位:円)

			(35 H)(1 13 · 1 4)
	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	700, 000	210, 000	910, 000
2010 年度	1, 000, 000	300, 000	1, 300, 000
2011 年度	600, 000	180, 000	780, 000
年度			
年度			
総計	2, 300, 000	690, 000	2, 990, 000

研究分野: 人文学

科研費の分科・細目: 芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般 キーワード: 映画研究 ゴダール 表象文化 歴史と記憶

1. 研究開始当初の背景

映画作家ジャン=リュック・ゴダール (1930-)が当時すでに半世紀に及ぼうとしていたみずからのキャリアを集大成したヴィデオ作品『映画史』 *Histoire(s) du cinéma*

(1988-98)では、それ以前の時期の作品においては必ずしも明瞭でなかった「歴史」や「記憶」のテーマがはっきりと前面に出てきている。しかも、彼が関心を寄せる歴史的な出来事は、第二次世界大戦期におけるレジスタンスやホロコースト、そして戦後のパレスチナ

問題を経て、90年代以降の旧ユーゴやチェチェンの紛争に至るまで、20世紀ヨーロッパ史のクリティカルな出来事に集中している。『映画史』以降の長編劇映画である『愛の世紀』(2001)や『アワーミュージック』(2004)でもやはりそのような「歴史」のテーマが物語の根幹にあることを考え合わせれば、『映画史』以降のゴダールは「歴史」というファクター抜きには十分に理解できないと言ってよい。

実際、『映画史』完成以降のアカデミックなゴダール研究では、より広範な社会的・文化的領域での記憶のテーマへの着目をも反映して、ゴダールと歴史・記憶のテーマの関連が注目され始めた。こうした研究動向は、かつて拙訳により共編著書『ゴダール・映像・歴史』(産業図書、2001年)で紹介したフランスおよびイギリスの主要な『映画史』研究を見渡すことによってもある程度見て取れるだろう。

以上のような状況を背景に、2005-2006 年度の科学研究費補助金による研究課題「ジャン=リュック・ゴダールの後期作品における歴史と記憶のテーマに関する研究」では、『映画史』およびそれ以降の作品における歴史と記憶の映像による表象のメカニズムを研究した。本研究課題は、その成果をもとに、分析対象とするコーパスをゴダールの全キャリアに拡げ、より包括的な観点からゴダールと歴史・記憶の表象を探究する試みである。

2. 研究の目的

本研究は、一方では新作も含めた『映画史』 以降の作品を主な分析対象とし、他方ではゴ ダールのフィルモグラフィーをさかのぼっ て、「歴史」への関心がどのようにして生ま れてきたのか、『映画史』以降のゴダールに 見られる歴史的想像力やそれを映像にはっ て実現する際の方法論の萌芽が以前の作品 にどのように現れているのかといった事柄 を探究する。このように、『映画史』以降の 地平に立脚しながら、「歴史」を軸にゴ ルの全キャリアを見直すことによって、 特異 な「歴史家」としての新たなゴダール像を提 示することが本研究の目的である。

ゴダールは、現実から遊離した晦渋な映像の実験のみに邁進してきたわけではなく、かなりの程度、現実社会のさまざまな出来事と交渉してきた。そのような出来事の実例としては、『小さな兵隊』(1960)の主題であるアルジェリア戦争、『気狂いピエロ』(1965)で軽く触れられ、短編「カメラ・アイ」(1967)で中心的な主題となるヴェトナム戦争、『中国女』(1967)がその「予見」であるとされ、一連のシネ・トラクト(1968)や『ありきたりの映画』(1968)で正面から題材とした五月革命などが

すぐさま思い浮かぶ。だが、『映画史』以降の地平から振り返ったときに重要なのは、ジガ・ヴェルトフ集団期の 1970 年にパレスチナで撮影した未完の『勝利まで』のフッテージを、新たな同志アンヌ=マリー・ミエヴルとともに再編集し、1975 年に『ヒア&ゼア』として完成させた経緯だろう。その過程で、同時代の出来事に直接的に向き合うというよりは、出来事を他の出来事との「モンタージュ」において考察するというゴダール特有の方法論が鮮明になっていく。

興味深いことに、ちょうど同じ頃、『映画 史』の最初の構想がなされ、またみずからも 思春期を過ごした第二次世界大戦期の歴史 への関心がはっきりしたかたちで表明され るようになる。『映画史』に見られるような、 概念的な意味での「モンタージュ」を 20 世 紀の歴史をとらえるために活用するという 発想は、とりわけこの時期に淵源があると思 われる。

歴史に対するゴダールの着想の特異性を際立たせるためには、同様のテーマを扱う他の映画作家との比較に頼るのが有効である。とりわけ、第二次世界大戦期の歴史に関しては、1950年代以降、アラン・レネ、マルセル・オフュルス、クロード・ランズマンらをはじめとする多くの映画作家が、映像作品のかたちで重要な考察を展開してきた。一言えば、非ユダヤ系かつ反シオニストの立場から、歴史的出来事にまなざしを向けるという点に、類似したテーマに取り組む他の監督たちとの相違点があると考えられる。

以上のような見立てに基づいて、『映画史』 着想の時期から、完成作品としての『映画史』 を経て、それ以降、現在に至るまでのゴダー ルを特異な「歴史家」としてとらえなおすこ とが、本研究の目的となる。

3. 研究の方法

本研究課題の研究方法は、主として、(1) 研究対象となる作品の詳細な分析、(2)その直接的・間接的な背景を理解するための文献講読、(3)関連する映像作品の収集・視聴・分析という、3つのプロセスを複合させたやり方である。

(1)については、『ゴダール・ソシアリスム』 (2010)をとりわけ詳細に分析しつつ、強制収容所のテーマが絡んでくる『恋人のいる時間』(1964)、『ヒア&ゼア』(1975)などの分析に力を入れた。

(2)については、ゴダールや彼の作品に直接 関係する文献をできるかぎり網羅的に蒐集 し、読み込むことはもちろん、他にもとりわ け、ヌーヴェル・ヴァーグ前夜以降のフラン ス映画文化の諸相、ホロコーストの歴史と文化的表象、対独レジスタンス史、パレスチナ問題、哲学的・思想的な各種イメージ論といった領域についての理解を深めることを目指した。

(3)については、アラン・フレシェール監督による『ジャン=リュック・ゴダールとの対話の断片』(2009)といったゴダールに直接関係するドキュメンタリー作品のほか、比較考察の対象となりうるアラン・レネ、フランメワ・トリュフォー、クロード・ランズマン、ハルン・ファロキ、アルノー・デ・パリエール、クリス・マルケル、アレクサンダー・クルーゲといった映画作家たちの作品そのものに、映画祭、特殊上映、DVDなどあらゆる手段を含めてアクセスすることにつとめた。

4. 研究成果

本研究課題の成果は、(1)新作も含めた『映画史』以降の作品の分析に関するもの、(2)『映画史』以前の時期の作品の再読に関するもの、(3)その他に大別できる。以下、それぞれの項目について、今後の展望等も含めて記述する。

(1)新作も含めた『映画史』以降の作品の分析 に関しては、研究期間中の 2010 年にゴダー ルの6年ぶりの新作『Film socialisme』(邦 題『ゴダール・ソシアリスム』)が公開され たため、その精読・翻訳・注釈に多くの時間 を費やし、その成果の一端は、同年 12 月の 日本公開に際して発売された『ゴダール・ソ シアリスム』の劇場パンフレットに、詳細な 注釈を付したシナリオ採録という形で発表 した。また、論文「イメージ、写真、社会主 義――『ゴダール・ソシアリスム』をめぐっ て」では、ゴダールの最新作を頻出する「写 真」のモチーフを軸に論じながら、彼がパレ スチナにどのようなまなざしを投げかけて いるかについての考察を伏在させた。その他、 2012 年 2 月に紀伊國屋書店から発売された 『ゴダール・ソシアリスム』の Blu-ray ディ スク封入のリーフレットに同作品の詳細な 解説記事を寄せた。

こうした研究の遂行と並行して、『映画史』以降のゴダールに関する論文等の収集・読解も進めてきた。それによって、『映画史』で扱われた歴史に関する主題を、ゴダールがその後、『愛の世紀』、『アワーミュージック』、『ゴダール・ソシアリスム』という3本の長編劇映画作品でどのように展開していったのか、より鮮明に理解することができた。今後は、『映画史』構想時から現在に至るゴダールの軌跡を、特異な「歴史家」の仕事とし

て一貫したパースペクティヴのもとにより 具体的な成果として描き出すことを目指す。

また、狭い意味での映画研究に閉じこもる のではなく、より広範なパースペクティヴか らゴダールを論じるために、種々の哲学的な イメージ論の読解も行った。その作業の成果 の一つとして、綿密な『映画史』論やランズ マンの『ショアー』と表象不可能性をめぐる 論考を含むジャック・ランシエールの書籍 Le Destin des images (Paris: La Fabrique, 2003)の邦訳を刊行することができた(平凡 社、2010年3月刊行)。本書全体の射程は本 研究のスコープをはるかに超えるものだが、 ランシエールの発想の根底にある表象的体 制と美学的体制の区別という考え方は、ゴダ ールやランズマンらの作品における歴史や 記憶の取り扱い方をより広範なコンテクス トから見定めるためにも大変有益であると 言える。

(2) 『映画史』以前の時期の作品の再読の作業 については、とりわけ、ゴダールにおける強 制収容所とホロコーストの表象の特異性を 解明することに力を注いだ。その主な成果と しては、2010年9月17日にカナダのレジャ イナ大学で催されたゴダールをめぐる学会 にて、1960年代から現在までのゴダール作 品における「強制収容所」というトポスの重 要性と意義について発表を行った。また、「運 動家ゴダール――スポーツ、身体、メディア」 は、直接的には、ゴダール作品に頻出するボ クシングやテニスといったスポーツのモチ ーフにとりわけ「運動」と「身体」の次元で 着目し、その映画史的連関(とりわけ、ハリ ウッドのボクシング映画、およびジャック・ タチとジェリー・ルイスとの絡み) やメディ アとの関わりを論じたものだが、部分的に解 放時の収容所で撮られた写真のコラージュ の仕方についての考察を含んでいる。

ホロコーストないし強制収容所の表象に ついては、他の映画作家との比較考察も重要 である。その前提に立って、ハルン・ファロ キ、ランズマン、ゴダールによる収容所の表 象の3つのタイプを図式的に整理した発表 「カタストロフへのまなざし――収容所の 表象をめぐって」を行ったほか、論文「アラ ン・レネを見るゴダール――『ヒロシマ、モ ナムール』から『映画史』へ」では、若き日 のゴダールがアラン・レネの『ヒロシマ、モ ナムール』(1959)に大きな衝撃を受けたと語 っていることを手がかりに、レネの初期作品 群がゴダールに対して、現実社会の悲劇的な 出来事を高度な映画的手法でもって表象す るための一つの強力なモデルを差し出した のではないかという仮説を提示し、それを検 証しながら、ゴダールのキャリアにおいて 『ヒロシマ、モナムール』から『映画史』の 収容所表象へとつらなる一本の道筋を提示 しつつ、映画芸術がどのように社会的事象を 表象しうるのかをめぐる原理的な考察を伏 在させた。

今後の展望としては、写真も含めた映像によるホロコーストの表象史に照らして、ゴダールの特異な方法論がどのような意味を持っているのかを、パレスチナ問題に対するゴダールの立場の考察も含めて、さらに解明していく必要がある。

(3)上記のような直接ゴダールに関係する成果のほかにも、本研究から派生したともいえるいくつかの成果がある。そのうち、とりわけ映画と写真の取り結ぶ関係性については、論文「映画にとって写真とは何か」〈3〉〈4〉で、ゴダールだけでなく、エリック・ロンジョン・ステザカーの写真作品にとって写真とは何か」〈3〉〈4〉で、ゴダールだけでなく、エリック・ロンン・ステザカーの写真の行い、また日本のドキュメンタリー作家・る行い、また日本のドキュメンタリー作家・る研究の成果を2010年7月7日にパリ第3大会のサマースクール(夏期に開催される学会)にて発表した。こうした成果を、ゴダール研究と有機的に結び合わせていく作業も、今後取り組む課題として残されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① <u>堀潤之</u>、「『ゴダール・ソシアリスム』解 説」、査読無、『ゴダール・ソシアリスム』 DVD リーフレット、紀伊國屋書店、2012 年2月、22-42頁
- ② <u>堀潤之</u>、「イメージ、写真、社会主義—— 『ゴダール・ソシアリスム』をめぐって」、 査読無、『関西大学文学論集』第 60 巻第 2 号、2011 年 9 月、47-62 頁
- ③ <u>堀潤之</u>、「映画にとって写真とは何か〈4〉 「映像の停止」をめぐる覚え書き」、査読 無、『写真空間4』、青弓社、2010年7月、 134-141頁
- ④ <u>堀潤之</u>、「絶望的な反復の呪縛――松村浩行『TOCHKA』論」、査読無『中央評論』 270号、中央大学出版部、2010年1月、 133-139頁
- ⑤ <u>堀濶之</u>、「映画的不純性に向けて――ヌーヴェル・ヴァーグと「脚色」の問題」、査読なし、『研究叢書』062号、渋谷哲也編「映画におけるイメージとテクストの関係について―ドイツとフランスのニューシネマを例に―」、日本独文学会、2009年10月、65-80頁
- ⑥ 堀潤之、「映画にとって写真とは何か〈3〉

スチル写真とフォトグラム」、査読無、『写真空間3』、青弓社、2009 年 5 月、127-136 百

[学会発表](計5件)

- ① <u>堀潤之</u>、「カタストロフへのまなざし―収容所の表象をめぐって」、東西学術研究所比較映像文化研究班研究例会(シンポジウム「震災と映像」)、2012年1月28日、関西大学
- ② <u>Junji Hori</u>, "Godard and the Concentration Camps", Sonimage: The Legacies of Jean-Luc Godard, September 17, 2010, University of Regina, Saskatchewan, Canada.
- ③ Junji Hori, "Cinéma, photo, regard: autour de Self and Others de Makoto Sato", Université d'été de l'Université Sorbonne Nouvelle-Paris 3, 7 juillet 2010, Institut National de l'Histoire de l'Art (INHA), Paris.
- ④ <u>堀濶之</u>、「ヨーロッパの映画作家と中国」、 東西学術研究所比較映像文化研究班研究 例会、2010年1月22日、関西大学
- ⑤ <u>堀潤之</u>、「間メディウム性の系富岳」、表象文化論学会第4回大会、2009 年7月5日、京都造形芸術大学

[図書] (計3件)

- ① <u>堀潤之</u>「アラン・レネを見るゴダールーー『ヒロシマ、モナムール』から『映画史』へ」、杉野健太郎編『映画のなかの社会/社会のなかの映画』所収、ミネルヴァ書房、2011 年、171-202 頁
- ② <u>堀潤之</u>「運動家ゴダール――スポーツ、 身体、メディア」、塚田幸光編『映画の身 体論』、ミネルヴァ書房、2011 年、1-31 頁
- ③ ジャック・ランシエール『イメージの運命』、単著、<u>堀潤之訳</u>、平凡社、2010 年 3 月 (総ページ数 198 頁)

[その他]

ホームページ等

http://d. hatena. ne. jp/tricheur

- 6. 研究組織
- (1)研究代表者

堀 潤之 (HORI JUNJI) 関西大学・文学部・准教授 研究者番号:80388412